

# 雪舟等楊と笑雲瑞訢

——水墨画と入明記にみる明代中国——

村井章介

はじめに

雪舟等楊は、応仁元年（成化三、一四六七）から足かけ三年に及び、大内政弘派遣の遣明船に同行して、中国を旅行した。雪舟といえは、日本絵画史に聳え立つ「画聖」と称えられ、中国旅行についても、その画業の飛躍に大きな役割を果たしたできごととして、種々論じられてきた。そのかげで比較的論じられることの少ない作品群に、中国でじっさいに見た景物を写したとされる一連の実景画群や「国々人物図卷」がある<sup>(1)</sup>。

雪舟は、寧波到着後まもなく天童山に赴いて首座<sup>しよそ</sup>（第一座）の地位を得た。これは北京大興隆寺住持魯庵純拙が一四六八年に雪舟に与えた「送雪舟詩并序」（永青文庫蔵）に「日本僧の揚雪舟なる者、……去歳より四明（寧波）に遊び、天童山第一座に陞る」とあって、疑いのない事実である<sup>(2)</sup>。雪舟は帰国後、作品にしばしば「天童第一座」の称号を誇らしげに書き入れている<sup>(3)</sup>（図1）。一五二二年入明の遣明正使了庵桂悟は、「題雪舟山水図詩」（藤田美術館蔵）



図1 「慧可断臂図」部分(図録『没後500年特別展 雪舟』p.160) 齐年寺蔵

のなかで、そのことに触れて「字号雪舟諱等揚、自ら天童典賓職と謂ふ<sup>(4)</sup>」といい、みずからの遣明使行を「東藩入貢して觀光を喜ぶ」と表現し、文末で「大明阿育王山広利禪寺百二代」と名乗っている。兩人をふくむ日本五山僧の中国崇拜ぶりがよく表れている。

いっぽう、遣明使節僧の中国での行動を伝える文字史料に、「入明記」と呼ばれる一群の記録がある。雪舟の加わった遣明使に関しては「戊子入明記」があるが、これは遣明使節行にかかわる文書の写を中心とする記録で、旅行記ではない。もっとも年代の近い遣明使の旅行

記として、一四五三年入明の遣明使(正使は東洋允澎<sup>(5)</sup>)に從僧として参加した笑雲瑞訶<sup>(6)</sup>の「入唐記」(『笑雲入明記』)がある。雪舟研究に充分に活用されているとはいいがたい史料だが、雪舟と笑雲の中国体験には重なりあう部分が多く、<sup>(6)</sup>『笑雲入明記』を読みこむことで、「雪舟と中国」というテーマをあらたな角度から照らしだせるかもしれない。

雪舟と笑雲。かたやだれもが知る「画聖」であり、こなたはほほ同時代人だが(笑雲がやや年長か)、どこかでその軌跡今はほとんど無名の一禅僧にすぎない。また、ふたりはほほ同時代人だが(笑雲がやや年長か)、どこかでその軌跡が交わった形跡もない。しかし、えがたい入明体験を雪舟は絵で、笑雲は文で後世に残した。それらを総合することで、一五世紀の渡海禅僧が中国でなにを体験したか、その体験は東アジア史のなかでどんな意味があったかを、考え

てみたい。

一 「国々人物図巻」と『笑雲入明記』の諸蕃

「国々人物図巻」の実用性

京都国立博物館の所蔵する伝雪舟「国々人物図巻」(図2)は、種々の身分や民族の人びとの姿、象・駱駝以下の動物、「馬船」という帆船を描く。最後に「行年八十二雪舟筆」という落款があり、これに従えば帰国の三二年後に描かれたことになるが、この落款は写で疑う余地がある。二三人の人物、六種の動物を並べる形式は、異国情報を盛つた人づくし、動物づくしの絵にふさわしいが、それにしては船が一つだけなのが不審である。

『笑雲入明記』癸酉(一四五三)八月二四日条に、揚州広陵駅の繁華な情景を、「駅楼は重々として簷楹(えんえい)(軒と柱)飛舞す。駅の前は江淮等の処の馬・快・紅・站諸船、舳艫相啣(じくろあひか)む」と描写し、同九月二五日条にも、大運河の終点通州通津駅について、「馬船・快船・孔船・站船・運糧船等四集す。諸船はみなここに繋ぐ」と説明する。ともに馬船を筆頭に、大運河をいきかう船の種類を列挙している。馬船は相当数の人と荷物を載せられる貨客船で、もつとも目につく存在だったらしい。快船は快速船、紅船は囚人を載せた船、站船は役所の公用船、運糧船は食糧運搬船である。以上より、「国々人物図巻」は現状がすべてではなく、ほんらいは馬船のあとに何種類かの船が描かれていたのではないか。<sup>(7)</sup>

本図は雪舟が中国滞在中に目にしたものを写した作といわれている。たしかに、雪舟描く諸蕃のうち、西蕃人・天



図2 「国々人物図巻」(『雪舟等楊 「雪舟への旅」展研究図録』p.72)  
京都国立博物館蔵

竺人を除く人びとは、一四五三年入明の遣明使によって目撃されており(『笑雲入明記』、後述)、雪舟もかれらをじっさいに見た可能性は高い(8)。また動物の最後に日本でも珍しくない猪子が描かれていることも、おなじことを示唆する。だが一方で、人物も動物もほぼ統一されたフォーマットで描かれていて、「職貢図」等、下敷きとなる何らかの絵巻ないし図譜の存在が想定される。

ただし「職貢図」等が、中国王朝に入貢する諸蕃の姿を描いて朝貢秩序を視覚化する意図をもつのに対して、「国々人物図巻」では、前半の一四人が王から百姓に至る各階層の明人、後半の九人が回々人・嚙旦(遼東)人・西蕃人・女真人・南蕃人・天竺人・高麗人・琉球人・レウトウ(遼東)人の諸蕃となつている。諸蕃の一員としての日本人の眼から、眼に触れたあらゆる範疇の人間を描こうとする意思が感じられる。ほとんどの人物が左斜め前から見た角度で描かれるが、西蕃人は真横をむき、天竺人は正面をむいて首を右に振り、首を左に振るつぎの高麗人と視線を合わせるように描くなど、多少の変化をつけている。

ここでは、諸蕃がすべて「何々人」と記されていること、唱人・武者・羅摩僧(ラマ)が職能に対応するグループと判断されること、の二点から、一四

人目にくる羅摩僧を前半に入れたが、この並びからも読みとれるように、羅摩僧は国の内外の境界にまたがる類型であった。そのことは、『笑雲入明記』の甲戌年（一四五四）元旦拝賀の記事に、「日本・頼麻ラマ・高麗・回回・韃旦・達々・女真・雲南・四川・琉球等諸蕃みなこれに預かる」とあって、頼麻・雲南・四川が「諸蕃」扱いになっていることからも推察される。

前半の一人めまでは、王・唐僧・太人・秀才・秀才・外郎・内官・道士・太人女子・百姓・百姓女子で、太人女子までが聖俗の支配層である。王のみが椅子に座っている。内官（宦官）・道士など中国に特徴的な存在や、官民の女子にも眼を注いでいる。二像ある秀才は有冠の壮年と無冠の若年を描き分けているようである。道具を持つ者は左手に剣を握る武者のみである。唱人は楽人かと思われるが、楽器等は持っていない。

動物はすべて左向きで、象・駱駝（文字表記を欠く）・騾馬・驢馬・羊・猪子の六種。選択の基準は不明だが、画家がじっさいに見たものに限ったのかもしれない。

以上、「国々人物図巻」は日本水墨画において類例のない作品であり、一六〇九年の「三才図会」に先行する「国づくし」の絵画作品として注目される。中国情報を整理して日本人に見せる実用的な目的があったものと思われる。ともに遣明使に加わって雪舟と知己となった呆夫良心ばいふは、一四六七年豊後府中のアトリエを訪れて書いた「天開図巻（10）」（二枝軒梅船『図書考略記』巻二所収）に、「公嘗て南遊し、余も亦同舟し、天下の名山・大川を歴覽せり。都邑の雄富、州府の盛麗、及び九夷八蛮、弁服縑衣（草や毛の衣服）、異形奇状の物を以て、一一模写す。以て之を手に得て心に応ずれば、則ち其の画意の闊にして大なること、言わずして知るべし矣」と記した。「国々人物図巻」に描かれたものが、「九夷八蛮、弁服縑衣、異形奇状の物」の一部であることは疑いない。

『笑雲入明記』に記された諸蕃

『笑雲入明記』には、諸国から朝貢のために明を訪れた使者の姿が多く見られる。

癸酉（一四五三）六月二五日、寧波滞在中の笑雲一行は、温州から来た李内官から、琉球が馬一五匹・硫黄二万斤・蘇木一五〇〇斤を買した、という情報を得た。笑雲がとくにこれを書き留めたのは、馬と硫黄が日本からの貢納物と重複しており、どちらが先に京着するかも関心事だったからであろう。八月二六日には淮安府山陽県で「刺麻国番僧の船二隻、北京を辞して帰る」のすれちがった。

九月二六日に北京の会同館に落ち着いてからは、同時に在館した「南蛮爪哇国人百余人」から日本と通信したいと求められたり（一〇月一三日）、全員馬皮を着て韃靼人に似た女真人や（同月一四日）、献馬二〇匹を帯同した回回人や（同月二〇日）、駱駝二〇余匹を帯同した韃靼人八〇〇人（十一月一六日）や、高麗官人（十二月九日）や、四川人二〇〇余人（同月二三日）やの来朝を目撃した。ここでも四川人が外国人として会同館に宿泊していることが眼をひく。回回人到着の翌日には、かれらの宿舎を訪問して、字を書くところを見、横書きであることや梵字と似て非な字形に注目している。むしろ、逆に日本人が見物されることもあった。十一月八日の朝参で、奉天門で日本貨物を献じたとき、韃靼・回回の諸蕃がこれを観ていた。また、一二月二一日に会同館本館で茶飯のもてなしがあったときには、清海という日本人が高麗人と席次を争い、主客司がやってきて日本を左、高麗を右と裁定するという一幕もあった。

年末に外国人がつぎつぎ来朝するのは、元日の拝賀に参列するためで、あらかじめ明側からその意向が伝えられて

いたものと思われる。暮れもおしつまった二七日、百官が朝天宮に集まって歳旦朝礼のリハーサルが行われたが、その場に外国人も全員呼ばれて参加した。そして元旦、諸蕃が顔をそろえて拝賀に臨んだことは、前述のとおりである。<sup>(11)</sup>

## 二 紫禁城で龍顔を拝す

### 習礼、朝参、賜宴

笑雲らの日本進貢使は、北京入城三日目の景泰四年（一四五三）九月二八日、早くも朝参を許された。その前日、鴻臚寺習礼亭で朝参礼の練習があった。十一月一四日の冬至朝参の二日前、元日の歳旦朝礼の四日前にも、朝天宮に諸蕃が呼ばれて練習を行なっている。

初の朝参では、長安街から長安門（現存せず）、承天門（現、天安門）、端門を抜けて、午門の腋門（おそらく左腋門）から紫禁城内に進入した。進貢使たちは、宮城の中心奉天殿（現、太和殿）の正門である奉天門（現、太和門）で景泰帝に見え、官人の提唱に従って、鞠躬として拝し、起って叩頭し、起って平身し、跪いて叩頭した。これで朝参が終わり、ついで午門の左腋門から南に張り出した闕左門で賜宴があった。宴が果てると端門に移動し、跪き叩頭して門を出、礼部院に赴いて礼部尚書胡濙に拝謁した（図3）。

三日後の一〇月一日にも同様の次第で朝参があり、翌二日の朝参で、いよいよ正使東洋允澎が奉天門で日本国王の表文を捧げ、進貢使のもっとも重要な任務が終わった（捧表とならんで重要なはずの日本国王あて詔書の受領につい

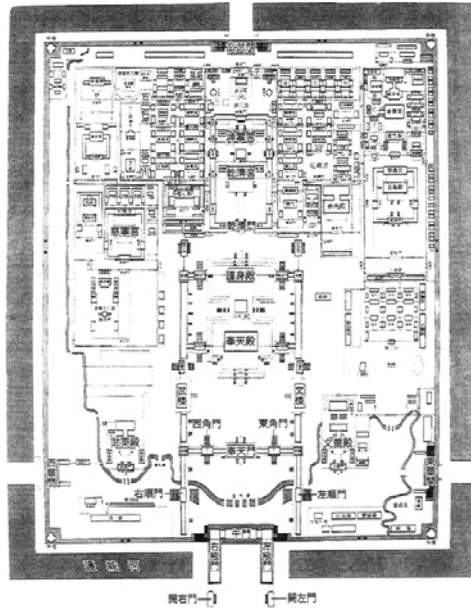


図3 紫禁城図（東洋文庫798『笑雲入明記』p.107）

ては、なぜかどこにも記事が見あたらない。次第は前二回とほぼ同様である。この日日本貢馬二〇匹が京着、これに随行してきた馬船衆が四日に奉天門で天子に朝見し、五日には天子が奉天門で貢馬を覽た。八日には四・六・七・八号船の衆が入京し、一〇日に朝參を遂げている。一日、礼部で日本勘合の検査があり、一五日にまた奉天門で天子に朝見した。この日は賜宴ののち、皇帝の秘書局ともいべき翰林院を訪れている。

一月一日は新曆（次年の曆）を頒<sup>わ</sup>かつ日である。進貢使は奉天門の左隣の西角門（正しくは右隣の東角門か）から入り、左に進んで奉天門、さらに右に進んで奉天殿に至った。奉天殿まで進入するのはこれが最初である。ここで皇帝に見え、朝礼が終わると、「景泰五年甲戌曆」を賜わり、百官・諸人がわれさきに曆を奪いあった。闕左門での賜宴、礼部院での謁見は九月二八日と同様で



ある。一月八日の朝参で日本貨物を献じ、同一二日の朝参で衣を賜り、同一三日の朝参で賜衣の謝を致した。この日また礼部院で謁見があった。同一四日の冬至朝参では、一日と同様奉天殿で天子に見えたが、文楼・武楼にはさまれた殿前の広場では、万官が所定の場所に整列し、万歳三呼の声は天地をゆるがした。

景泰五年（一四五四）元日朝賀の儀式は、二七歳になった景泰帝が奉天殿に出御すると、通常の朝参よりはるかに煩瑣な拝礼が行われ、万歳の三呼、万々歳の三呼があり、また拝礼があった。儀式には前述した多数の諸蕃使が参列し、賜宴にも預かる、という盛儀だった。また、正月一日から翌日にわたった天壇行幸も、奏楽して前を行く者数千人、宝玉を背負って行く象三匹、六龍車二台、二頭の象が牽く車二台、帝の鳳輦ほうれんを擁衛する武官数万人、甲冑を着けて馬に乗る兵士三六万人という、たいそうなものだった。「国々人物図卷」に描かれた象は、年はちがうがこの儀式に登場した象ではあるまいか。

『笑雲人明記』に記される日本進貢使の朝参は計二六回で、そのうち帝の出御は九回あった。<sup>(12)</sup>たいへんな精励ぶりである。九回のうちとくに重要な一月一日（頒曆）、同一四日（冬至）、正月一日（歳旦）の三回は、進貢使は紫禁城の中心かつ最大の建物である奉天殿にまで至って皇帝に拝礼したが、他の六回は皇帝が日常政務を覽る空間である奉天門に出むいて朝見が行なわれた。朝参がすむと、進貢使は闕左門に移動して宴を賜わった。一二月二日の朝参の記事に「朝参毎に必ず宴を賜ふ」とある。歳旦の賜宴はとくに「光禄宴」と呼ばれている。

笑雲の記録したように進貢使がひんばんに天子に見えるのは、はたして普通のことだったのだろうか。試みに、嘉靖一九年（一五四〇）の三月二日から五月九日まで北京に滞在した遣明使（正使湖心碩鼎・副使策彦周良）のケースと比較してみよう（『策彦和尚初渡集』）。策彦一行は三月七日に初度の朝拜（朝参におなじ）を遂げたが、その場所

は午門の前すなわち紫禁城の外であつて、当然嘉靖帝の出御はなかつた。持参した表文を朝拝の場で捧呈することもかなわず、翌日通事に託して礼部に届けるという粗略な扱いを受けた。その後も天子の病氣や外出を理由に朝拝は省略されることが多く、三月一九日に会同館での大茶飯を謝するための拝礼が午門で、五月二日に賜衣を謝するための拝礼が禁庭（詳細な場所は不明）で、行なわれたに留まる。離京前々日の五月七日になつて、ようやく午門の内、奉天門左前方の左順門まで入ることを許され、回詔が手交されたが、これも応対したのは太監（高位の宦官）にすぎなかつた。策彦らはおそらく天子の顔を拝むことはなかつたであらう。

笑雲らの見えた天子景泰帝は、一四四九年に、モンゴル親征を試みた兄正統帝が土木堡どぼくはでオイラートの首長エセンの虜となつた（土木の変）ために、思いがけなく皇位を踐んだ。一年後に送り返されてきた兄を、皇城の一角に幽閉した状態で治世は推移する。景泰帝は、政務に励み諸儀式に露出することで、皇位にあることの正統性を顕示しようとしたのではないか。だがその努力もむなしく、一四五七年に兄の返り咲きを許してしまう（奪門の変）<sup>13</sup>。これに對して策彦らの遣明使については、前回に起きた寧波の乱（一五二三年）による対日感情の悪化が尾を引いており、これも常態とすることは妥当でない。

#### 雪舟、礼部院の壁に絵を描く

雪舟が加わつた遣明使は、笑雲らの遣明使に続くもので、雪舟の乗る三号大内船は一四六七年入明、ときの天子は景泰帝の兄の子成化帝であつた。笑雲らの遣明使は、船数九艘（計画段階では一〇艘）・総人員一二〇〇名にまでふくれあがつており、これに辟易した明は、一〇年一貢、船は三艘以内、総人員は三〇〇人以内という制限規定を日本

側に申し渡した。雪舟らの遣明使はこれを遵守したので、明側もそれほど悪感情を抱くことはなかっただろう。このとき大内船で雪舟と乗りあわせた儒僧桂庵玄樹は、「予嘗て日域応仁元年（一四六七）を以て、使を奉じて中華に赴く。其の翌年燕都（北京）に在り、早に大明宮に朝す」と記している（『島隠漁唱』『丁酉元旦之作』）。雪舟についてはたしかに記録を欠くが、それなりの回数朝参し、天子との会見もあったのではないか。

雪舟は、北京で「礼部院」の壁に絵を描くという榮譽を与えられたと伝えられる。<sup>(14)</sup>一四七六年に書かれた呆夫良心の「天開図画楼記」はつぎのように記す。

向者、大明国北京礼部院、中堂の壁に於て、尚書姚公、公（雪舟）に命じ画かして曰く、「凡そ今外蕃の重訳入貢せる者、殆ど三十余国に到るも、未だ公の画く所の如きを見ず。況や又本部は科擧の事を司るなれば、則ち中朝の名士、斯の堂に升らざる者莫し。是の時に及んで諸生を召し、壁上を指して必ず言はん、『是れ乃ち日本上人楊雪舟の墨妙なり。外夷にして猶ほ斯の絶手あり、二三子（君たち）何ぞ各おの汝の業に勤しみ、以て斯の域に到らざらん乎。』」と。方に大邦に於て賞嘆を加へらるること此の若き也。

この一件については、京都大学文学部所蔵『五山禅僧詩文集』に収める万里集九作「雪舟為余作金山図并序」（一四八一年）に、「雪舟翁、其の芸を以て大明国に入り、名を礼部の壁上に掛く。翁の丹青（絵画）、豈に本国の光華に非ざらん邪」とあり、おなじく万里の『梅花無尽蔵』卷三上「山谷先生画像賛并序」（一四八九年）に、「雪舟揚知賓、廻ち桑城（域）の人、再び南遊し、礼部春院の壁に画く」とあり（「再び南遊」は誤認、同書卷六「屏風雪舟揚公所画跋」（二四九〇年）に「本邦に楊公知賓なる者あり、雪舟と号す。……三十年前、南舶に駕して大明国を叩くこと三霜、……遂に官命を受け、礼部の院壁に画く」とある。

この挿話は超人雪舟のあかしとして早くから伝説化していった。彦龍周興の『半陶文集』巻三「四景図一景一幅、楊知客筆」（一四八九年）に「芸を挟んで速く中華に往く。天子其の画を観て、以て国の奇宝と為し、詔あるに非ざれば画くを得ざらしむ。遂に命じて天童名山第一座と為す」とあるのは、その早い例である。雪舟が天童山首座となつたのは上京前で帝命によるのではないし、成化帝が雪舟の絵を国の奇宝として、かれに勅許なく絵を描くことを禁じたという話にいたっては、むしろ説話の領域に属する。

ここで参考になるのが、前述のように、笑雲らの遣明使が初度の朝参後、礼部院に回って礼部尚書胡濙に謁見しており、同様の謁見が頒暦の朝参後、謝賜衣の朝参後にも行なわれたことである。雪舟も遣明使の一員としてこの種の謁見にあずかったことは充分可能性があり、「天開図画楼記」が礼部尚書として姚夔の名を挙げていることにもリアリティが感じられる。しかし天子との間では、朝見に出御した際にその顔を見るくらいはあったとしても、直接の対話は想定しにくい。雪舟に礼部院壁の絵を製作させたのは、あくまで礼部尚書姚夔だと考えられる。結局、「官命を受け、礼部の院壁に画く」（万里集九）というあたりが、事実に近いのではあるまいか。

雪舟が中国滞在中に描いたことが確実な大作に、東京国立博物館蔵「四季山水図」四幅（各49.3×75.7cm）がある（図4）。春・秋幅上部の左端、夏・冬幅上部の右端に「日本禅人等揚」という落款があり、その下に「等楊」と陰刻した朱方印が捺されている。さらに各幅に「光沢王府珍玩之章」（陽刻朱方印）・「荆南文献□」（世カ）章」（陰刻朱方印）という二種類の鑑蔵印がある。鑑蔵印については、「光沢王」を号し今の遼寧省を所領とした皇親の遼王一族（朱氏）が、永楽初年に荊州（湖南省）に転封されたこととの関わりが指摘されている。<sup>(17)</sup>北京で描かれた本作が遼王一族の蔵品となり、いつのころか日本に移って、近代に横浜の実業家原富太郎から東京国立博物館が購入した、と



図4 「四季山水図」四幅のうち秋冬幅（図録『没後500年特別展 雪舟』p.71）  
東京国立博物館蔵

いう伝来が推定される。

この絵は、渡航前・帰国後のいずれの作風とも異なっており、——かつて中国画とみなされたことがあったほど——中院体山水画の画風に忠実なものだという。綿田稔は、これを礼部院で描いた絵そのものだとする大胆な仮説を提起した。<sup>(18)</sup> たしかに「壁に画く」という表現を「壁に掛ける絵を描いた」と読むことは可能で、確証が得られたとまではいえないものの、興味ぶかい着想である。

一四六八年六月、雪舟は北京大興隆寺住持で仏教界を統括する僧録司の地位にあった魯庵純拙から、送別の詩ならばに序を賜った。<sup>(19)</sup> 「日本の僧楊雪舟なる者、天性画を善くす」で始まるこの詩序は、国家を背負う仏教界の最高権威という高みから、(絵を善くするとはいえ)蕃国の一朝貢使僧に賜与された、紋切り型の賛辞で埋めつくされている。笑雲らの遣明使も、「興隆寺大僧録司右善世南浦和尚」から「送行序」を賜っている(『笑雲入明記』戊戌二月二日条)。明における雪舟の行動が、遣明使節団の一員というのりを出ていないことが、このことからわかる。<sup>(20)</sup>

### 三 雪舟周辺の中国真景画卷群(一)——勝景図巻

#### 「勝景」の描出法とそのメンタリテイ

「伝雪舟」あるいは雪舟周辺の作とされる、実存する中国の風景を描いた一群の絵がある。

① 「唐土勝景図巻」 一卷 伝雪舟筆 京都国立博物館蔵

② 「唐山勝景画稿」 一卷 模写者不詳(原本雪舟) ポストン美術館蔵

③ 「唐山勝景画稿」二巻 模写者不詳（原本雪舟） 東北大学附属図書館狩野文庫蔵

④ 「揚子江図巻」一巻 伝秋月筆 フリア美術館（ワシントンDC）蔵

⑤ 「金山寺・育王山図」二幅 模写者不詳（原本雪舟） 個人蔵

⑥ 「西湖図」一幅 伝雪舟筆 静嘉堂文庫美術館蔵

⑦ 「西湖図」一幅 伝秋月筆 石川県立美術館蔵 弘治九年（一四九六）

①は、鎮江を中心とする揚子江右岸を描く第一段、蘇州東南の呉江周辺を描く第二段、蘇州府城西南の宝帯橋と太湖を描く第三段からなる（図5）。おおむね「伝雪舟筆」とされるが、きわめて真筆に近いものと見られており、なかには真筆と判定する美術史家もいる。<sup>(21)</sup> ②③は、前半で①とまったく同じ景物を描いており、①あるいはその祖本を忠実に模写したものである。後半は①にない定海・紹興を描いた第四段と寧波を描いた第五段からなる。②と③とで図柄に異同はないが、③は前半・後半を各一卷に仕立ててある。<sup>(22)</sup>

これに対して④は、巻末の狩野安信（一七世紀の絵師）の極書には雪舟の高弟秋月等観の作とあるが、オリジナルは雪舟のものという説が有力である。①〜③の第一段に相当する景色を描き、共通する景物が多いが、①〜③の第一段よりもかなり長い（図6）。描写の対象からみると、④から冗長な部分を削りとって再構成したのが①〜③の第一段という関係にある。<sup>(23)</sup> しかし描写のタッチからみると、①〜③が名所図会としてすっきり整っているのに対して、④は筆の走りが激しく、無意識のうちに写し取ってしまったような要素をもふくみ、混沌の力を感じさせる。単純に④（の祖本）が下書き、①（の祖本）が完成作としてわりきれない独自性を、④は秘めているのである。<sup>(24)</sup>

前掲した呆夫良心の「天開図画楼記」に、「公嘗て南遊し、余も亦同舟し、天下の名山・大川を歴覽せり。都邑の

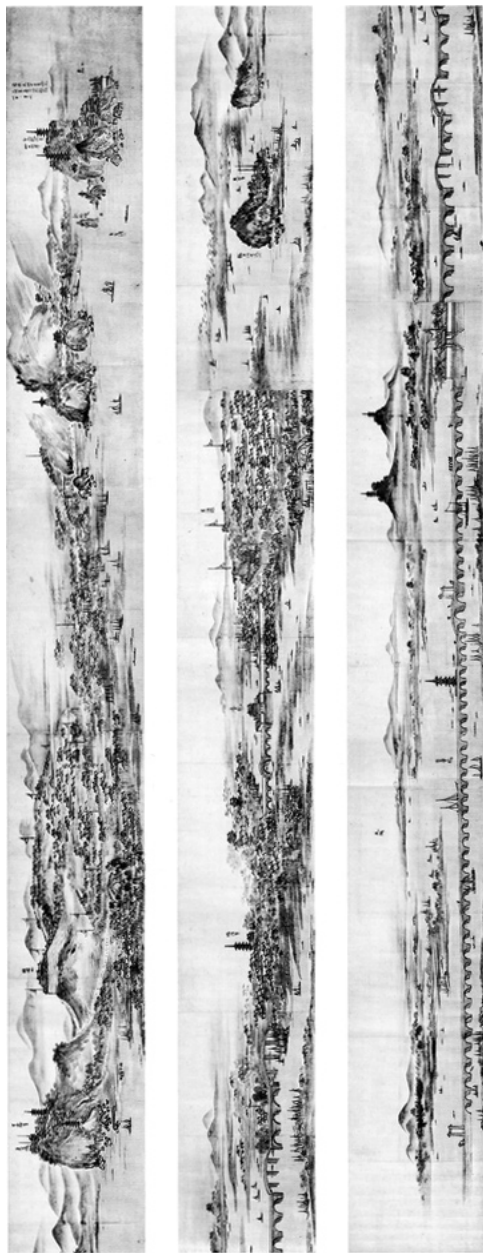


图5 「唐土勝景図卷」(「雪舟等楊「雪舟への旅」展研究図録」p.70)  
京都国立博物館蔵



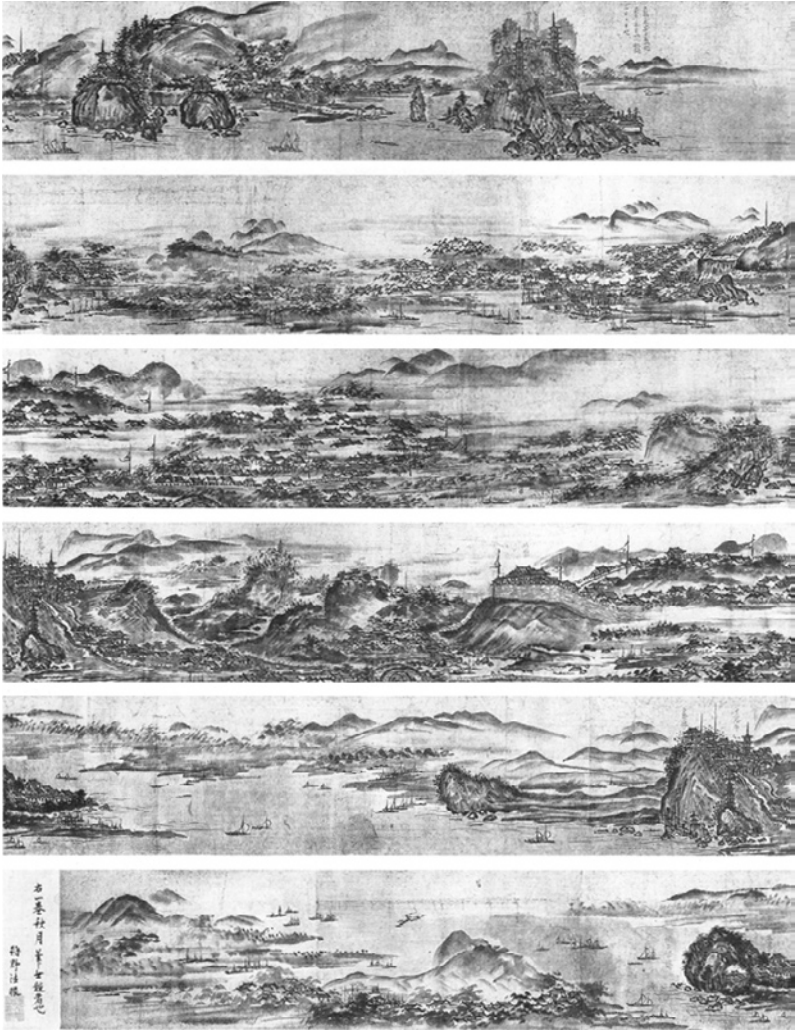


図6 伝秋月筆「揚子江図巻」(図録『没後500年特別展 雪舟』p.299)  
Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, Washington, D.C.

雄富、州府の盛麗、及び九夷八蛮、弁服縑衣、異形奇状の物を以て、「一模写す」とあるうち、「及び」より後は前述のように「国々人物図巻」に照応するが、傍点部に照応するのがこれらの絵と考えられる。

しかし、天下の山河を歴覧したというのははなはだしい誇張で、じつさいに描かれているのは遣明使の上京路に沿った観光名所であり、それも寧波から長江渡河点までの区間に限定される。この点でも遣明使節団の一員というのりを出ていないのである。また景物の描き方も、ありのままの山河を写しとったというよりは、それなりの約束事に従って描かれた名所図会の性格が強い。雪舟の完全なオリジナルでなく、先行する中国の名所図絵に範をとったものであろう。<sup>(25)</sup>

その約束事の事例を紹介しよう。ひとつは、第一段冒頭にある金山の描き方で、段全体は北から南を眺めた景色なのに、金山のみは南から北への眺めになっている(図7)。これは金山は南から見た景色が優れているため<sup>(26)</sup>で、じつさい、⑤の「金山寺図」のようにそれのみを独立させた作品も作られた(図9)。もうひとつは、②③の第四・五段に描かれる都市の順番で、第四段冒頭の定海県(現、鎮海市)は、寧波城外を流れる甬江が杭州湾に注ぐ地点にあり、寧波への出入口であるから、遣明使の旅程からすれば寧波のつきにくるのが自然である。<sup>(27)</sup>その順番をあえて避けた理由を推測すると、遣明使にとって明への出入口という実感が湧くのは何ととっても寧波であり、それがもつとも巻末に近い「日本船津」という書きこみ(後述)に露頭している。それゆえ寧波は絵巻の最後でなければならず、定海県が第四段冒頭に追い出された。では定海県がそこにくる必然性とはいえば、第四・五段を一巻に仕立てる③の場合、定海県と紹興府は切れ目なく続き、画面の両端で川が海に注ぐという、シンメトリックな構図になっている(図8、じつは二つの川はともに甬江なのだ)。このすわりのよさを求めた結果ではないか。



図7 「唐山勝景図巻」巻頭（図録『没後500年特別展 雪舟』p.72）

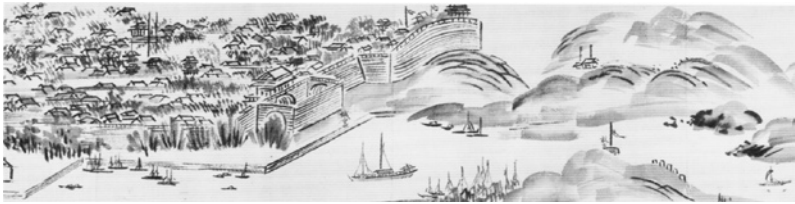


図8 「唐山勝景画稿」定海県と寧波府（図録『没後500年特別展 雪舟』p.213）  
東北大学附属図書館蔵

また、画面に相当数の文字が書きこまれていることも、名所図会としての特徴である。①第一段では、冒頭に「自北京四十日至此処、南京者自此処船路一日、半也」という文章があり(図7)、絵巻の始まりを告げる。続いて「金山龍遊寺／妙高峯」「郭朴塚」「上京渡也」(船の脇)「鎮江府即潤州府也」「北固山」「甘露寺」「多景樓」「焦山寺」「揚子江中流也」とある。第二段には「呉江県」「道士觀也」「接待寺」の三つ、第三段には「宝帶橋」「大湖」の二つがある。②③の前半と④(第一段のみ)にもまったくおなじ文字があり、①④の相互の深い関係性を表している。②③後半の第四段では「放火」(烽火台)「城裏」「定海県」「鎮」「蓬木駅也」(蓬萊駅の誤り)「北門也」「紹興府」「会稽山」があり、第五段では城内に「天寧寺」「四明駅」「湖心寺」「南胡」(南湖か)、城外に「北門」「寧波府東門也」「船橋」「日本船津」がある(図8)。<sup>(28)</sup> 觀光名所はたんに景色が美しいだけでなく、固有名詞が伴わなければならない。これらの絵が、〈日本人に中国の「勝景」を見せる〉という実目的にそって作られていることは明瞭である。

『笑雲入明記』に記された「勝景」

『笑雲入明記』には、金山、焦山、北固山、鎮江府、甘露寺および多景樓、呉江県、太湖、宝帶橋など、①③に描かれたのおなじ名所についての記事がある。入明年次は異なっても、遣明使の寧波・北京間の行程はほぼおなじだったので、入明記からは文字によって書き留められた「勝景」を知ることができる。このような真景画と入明記との情報源の共通性から、高橋範子は、雪舟は入明前から描くべき名所についての予備知識をもっていたと推測する。<sup>(29)</sup>

まず、①④には描出がないが⑤に単独で描かれている育王山(阿育王寺)に、笑雲は寧波到着のしばらくのちに訪れている(癸西五月一四日条)。一行は、住持の清源本和尚から「鐘鼓を鳴らし大衆を率いて山門の外に出迎す」

という大歓迎を受け、大雄宝殿に導かれて薬師如来号を高唱し、茶堂で茶飯をいただいたのち、妙勝宝殿に入って大悲呪を誦した。阿育王寺には、その名のもとになった阿育王建立の舍利塔がある。寺僧はその「三十三重舍利塔を開き、その塔中に手を入れ、小塔を捧げて出」して見せた。その大きさは七、八寸ほどだったという。ついで寺内の祖师堂を訪れて「開山宣密居素禪師」と「当山三十三代無準和尚（師範）」の牌を見、承恩閣に進んで「釈教宗主笑隱訥禪師（大訥）」の牌を見た。その日は天童山景德寺まで行つて宿泊、翌日大雄宝殿、祖师堂（開山義興禪師の牌あり）、密庵咸傑塔（玲瓏巖・大白峰の間にあり）、九峰、双鏡万工池、万松関、宿鸞亭などを廻った（癸酉五月一五日条）。無準師範・笑隱大訥・密庵咸傑は日本の禪僧にも名のおった宋元の高僧である。

観光のようすは昔も今もあまり変わらないようで、現在でも阿育王寺と天童寺はセットでツアーコースになっている。とはいえ、遣明使一行がきわめて手厚く処遇されていることは注目にあたいたい。雪舟が天童山を訪れて首座（第一座）の称号を獲たことは前述のとおりだが、それは個人旅行というより、笑雲らと同様、遣明使一行としての半公式訪問だった可能性が高い。そうでなければ、名目的とはいえ天童山が首座の地位を与えることは考えにくいだろう。おそらく雪舟は訪問中に画技を披露し、その褒賞として首座の称号をもらったのではないか。

八月二〇日、呉江県では水郷らしい名所として長橋（垂虹橋）を見た。この橋は「洞」すなわちアーチが七二あり、一洞の幅は一間だった。この橋については帰路にも「呉江県、宝带橋五十三洞、垂虹橋七十二洞、橋の半ばに垂虹亭あり」という記事がある（甲戌五月一二日条）。同日条には続けて「ここより太湖に泛ぶ。湖はけだし湖・常・宜・蘇の四州を跨ぐ。片帆過ぐる所は、震沢・笠沢・松江・苕溪・顧渚・雪溪・姑蘇山・西塞山・洞庭なり。湖中に石堤あり、其の長さ四十里」とある。じつさいにこれらの場所すべてを見たり訪れたりしたわけではなく、太湖周辺の名

所を列挙したにすぎない。①②③の第三段には前述のように「宝帯橋」「大湖」の書きこみがあり、とくに宝帯橋は画面全体を横ぎって堂々たる存在感を見せる(図5下段)。アーチの数を数えてみると五三で、笑雲の記述と正確に一致する(現存する橋は絵ほど長大なものではないらしい)。

八月二三〜二四日には、①②③第一・二段に描かれた名勝をつぎつぎに通過した。二三日条に「鎮江府古潤州、丹陽県、南水関、北水関、甘露寺に高樓あり、額に多景樓と曰ふ、京口駅」とあり、二四日条には「揚子江を渡る…中流に二山あり、金山・焦山と謂ふなり」とある。また帰途は五月三〜四日に通過しており、三日条に「官船百余、送りて揚子江に至る、午に金山・焦山を過ぎ、晩に北固山の下に次る」、四日条に「雨中櫓を推して鎮江府丹徒県を出づ」とある。「鎮江府は古の潤州である」とか「金山・焦山は揚子江の中流にある」とかいう記述は、図巻と入明記に共通しており、コード化された情報になっているものと思われる。

ただし、五月四日条の続きに「(丹徒) 県は乃ち秦の始皇、赭衣三万人を發して地脈を鑿つ<sup>うが</sup>の処なり」といった故事が記されており、絵では表現しにくい得意分野といえよう。

#### 四 雪舟周辺の中国真景画卷群(二)——西湖図を中心に

##### ふたつの「金山寺図」

⑤の二幅は、金山寺・育王山という著名な寺刹を真正面から説明的に描いた絵で、雪舟筆の原本を模写したものと、いう(図9)。「金山寺図」に「大唐揚子江心金山龍遊禪之図、文明四年壬辰(一四七二)之秋、雪舟叟画」という



図9 「金山寺図」(図録『没後500年特別展 雪舟』p.126) 個人蔵

落款がある。帰国後三年目に日本で描いたものということになる。この絵について、大西廣は「いかにも懂れの名刹・金山寺を絵にしたといった感じの、お決まりのパターンだけで描いた、あんなありきたりな画像を、雪舟にしても、求めさえあるなら、案外と気楽に描いて人に与えていた形跡のあること……」と述べ、山下裕二は「意図された形式化」「模写されることを念頭に置いた制作」と性格づける。<sup>(31)</sup>

そのさらに九年後、東美濃の正法寺で万里集九と出会った雪舟は、「金山寺図」を描いて贈り、万里はこれにちなんで七言絶句一首と長文の序を作った(京都大学文学部国史研究室蔵『五山禅僧詩文集』所収「雪舟為余作金山寺図并叙」。序の一部を掲げる。

余の為に南紙を展ひげ、淳玉(浮玉か、金山寺の別称)の図を作る。両塔巍然として、郭璞

之墓あり、裴頭陀之場あり。翁（雪舟）一々指点し、且た曰く、「山中棗木多し、太半は寺産たり。〔槽過妨僧夢、濤濺驚仏身〕の句、未だ虚語たらざるなり」と。余之を聴き、恰も金鰲の背上に跨がるが如く、飄々乎として縹緲の間に浮游す。

万里が贈られた雪舟画には「郭璞之墓」や「裴頭陀之場」が説明の文字を伴って描きこまれていたらしく、雪舟はそのいちいちを指さして万里に説明している。郭璞は晋の詩人で経学・卜占にも長じ、葛洪の『神仙伝』に伝が載る。裴頭陀は唐の僧で名は法海といい、毀壞していた金山寺を再興した。「裴頭陀之場」とは、かれがそこに住んで毎日寺の修復にいそしんだという山洞か。この「金山寺図」は⑤の「金山寺図」とはかなり異なる図柄のようで、むしろ①④の金山寺部分を切り取ったものに近い絵かと思われるが、鳥を埋める建物群のなかでさほど目立たない、鳥の左塔がとくに目立ち（もちろん二塔は⑤にも描かれているが、鳥を埋める建物群のなかでさほど目立たない）、鳥の左側の河中に立つ岩に「郭朴塚」の文字が添えられている。雪舟はさまざまな図柄の「金山寺図」を描いて世すぎにしていた。まさに究極の「実用風景画」がここにある。

雪舟が引用した詩句は、五代南唐の詩人孫勗の絶唱とされる五言律詩「題金山寺」の頸聯で、異同あり、「過槽妨僧定、驚濤濺仏身」が正しい。<sup>(32)</sup> 船がいきかき荒波の立つ長江に忽然と浮かぶ金山が活写されており、それを雪舟は「まさにそんな様子だった」と友に語る。また、清代の寺志『金山志』巻七に、「中心叟（日本使臣）<sup>(33)</sup> 作の七言律詩「郭璞墓」が採録され、その頷聯に「水底に日月を行らす天有り、墓前に児孫の拝する地無し」とある。<sup>(34)</sup> 大内船で入明した中心・雪舟・桂庵玄樹らは、大内家重臣杉氏出身の延伯を中心とする詩の結社で結ばれていた。名勝金山をめくって古代以来堆積した詩の層。その上に立つて雪舟の制作は行なわれた。そこでは詩と絵が渾然一体となり、たがいに



響きあって「勝景」を描き出していた。

### 雪舟周辺の西湖図

②③を見て不思議に思うのは、遣明使の上京ルート上最大の人気スポットである西湖の場面がないことである。外国の名勝で西湖ほど日本人に慕われた所はない。明初江南に滞在していて、日明関係の緊張により雲南に流謫の身となった日本僧天祥は、西湖を夢に見て、何年も前に杭州で別れた友孫懷玉のために詩を作った（『滄海遺珠』巻四）。

杭城一別已多年      杭城に一別せしより已に多年

夢裏湖山尚宛然      夢裏の湖山    尚ほ宛然たり

三竺楼台晴似画      三竺の楼台は画似りも晴るく

六橋楊柳晚如烟      六橋の楊柳は烟如りも晚し

青雲鶴下梅辺墓      青雲の鶴は下る梅辺の墓

白髮僧談石上縁      白髮の僧は談ず石上の縁

残睡驚來倍惆悵      残睡驚來（覚める）すれば倍ます惆悵（嘆き悲しむ）たり

可堪身世老南溟      堪ふべきや身世（しんせ）の南溟（なんてい）（雲南）に老ゆるを

三天竺寺や蘇堤六橋は西湖周辺の名勝である。「梅辺の墓」は、西湖中の孤山に隠居して梅を妻、鶴を子とした林和靖の墓、「石上の縁」は下天竺寺の三生石にまつわる円沢と李源の故事を指す。その理想郷に遊ぶ夢から覚めると、南陔の地で朽ちようとしているわが身に悲哀がつるのである<sup>(35)</sup>。



静嘉堂文庫美術館蔵



東京国立博物館蔵

図10 伝雪舟筆「西湖図」(図録『没後500年特別展 雪舟』p.125)下段は勝哲による模本。

②③には場面を欠くものの、西湖を描いた絵は中国でも日本でも無数に生産された。<sup>(36)</sup>

笑雲は一四五三年六月、寧波の「勤政堂」の壁上に広さ五丈ほど(約一五メートル)という巨大な「杭西湖図」が掛けられているのを見た(『笑雲入明記』癸酉六月二一日条)。その図柄を推測させるのが、サイズはずっと小さいが⑥⑦である。

⑥は西湖の全景を東岸の高所から見下ろすように描いた絵で、孤山、蘇堤の六橋、保俶塔、浄慈寺、靈隱寺、三天竺など名所の数々が、漏らさず描きこまれている(図10)。筆にのびやかさを欠くので、雪舟の真筆とは考えにくい。しかし、かれの「西湖図」が存



図11 伝秋月筆「西湖図」(図録『没後500年特別展 雪舟』p.184)  
石川県立美術館蔵

在したことは、建仁寺の高僧で遣明正使の候補にもあがった天隱龍沢が、「画僧雪舟南遊の日、屢しば西湖に遊び、筆を執りて自ら晴好雨奇の変態を写しき」と述べていることで証される(『翠竹真如集』二所収「題扇面西湖図」)。この絵もおそらく⑥と似たような構図だったにちがいない。

⑦も⑥とよく似た図柄で、左上隅に「杭州西湖之図／於北京会同館／作、此図弘治玖年(一四九六)閏三月招請」の文字がある(図11)。このとき入明中だった雪舟の高弟秋月等観の作と考えられている。図中「北高峯」「南高峯」「三天竺」「靈隱寺」「飛猿峯」「保叔塔寺」「講寺」「惠果寺」「三賢」「六橋」「蘇公堤」「錢塘門」「湧金門」「清波門」の書きこみがあり、さながら「西湖名勝づくし」の観を呈する<sup>(38)</sup>。

#### 西湖体験の虚実

北京からの帰途の一四五四年五月、杭州を数日間観光した笑雲は、呉山のふもとにある伍子胥廟を訪れ、さらに登って三茅観の高所にいたった。そこで描写された「勝概」は、さながら「西湖

図」を見ているかのようだ。

観は蓋し呉中の勝概なり。西湖を左に、錢塘を右にして、呉山の半腰に拠る。湖中に屹立するは、則ち孤山なり。前面に突出するは、則ち飛來峯なり。北高峯・南屏山・六橋・三天竺、一望の間に在るのみ。（『笑雲入明記』戊戌五月一八日条）

いっぽう、一五四〇年九月、杭州城清波門外の湖畔から短時間觀望することしかできなかった遣明副使策彦周良は、「余、旧年海東に在りて其の図を見き。今その真を見て、頗る感慨を増」した。訪問の叶わなかった「三天竺・靈隱・淨慈等の諸寺、孤山・蘇堤・六橋の烟景」については、「画図中の物の如し」と、絵の記憶で我慢するしかなかった（『策彦和尚初渡集』下・嘉靖一九年九月三日条）。

逆に、ある日本貢使は、実見した西湖をかつて見た「西湖図」と引き比べて、画工をけなしている。——「昔年曾て湖を画く図を見しが、意はざりき人間に此の湖あらんとは。今日湖上打從過ぐ、画工猶ほ自ら工夫を欠くがごとし」（『重刊日本考略』）。

景色を「まるで絵のようだ」と感じるか、「絵も遠くおよばない」と感じるか。いずれにせよ、絵をフレームワークに実景を眺めるといふ倒錯は共通している。

『古画備考』が「追悼集」から引く「季英（雪舟の孫弟子季英周孫）説」は、雪舟の屏風絵を「西湖万頃、碧瑠璃の如し。昇れば寺は山を抱き、山は寺を抱く。鱗々乎として猶ほ湖山のごとし。殿社は席間に歴々分明たり」と描写し、縮地の方術によるものかと驚いている。また、先にあげた「題扇面西湖図」によれば、天隱龍沢は人を介して雪舟に依頼し、絹に描いた一本を周防から送ってもらって、おきふし眺めていたが、ある日鳳裔侍者という僧が、おな

じ図柄の扇面画を持ってきて天隠に見せ、題文を求めた。鳳裔が持参した絵は、天隠が「何に従り之を得て、以て扇画に上せるか、所謂名画は靈に通じ、羽化登仙する者か」と評しているように、雪舟画の写しであろう。さらに、希世靈彦は「題等悦所蔵如説〔拙〕牧牛図」という文のなかで、「雪舟の弟子雲峯等悦は、近年明から帰国して画境の進歩が評判なので、西湖図の製作を依頼して許諾を得ていたが、忙しかつたかまだできてこない」と歎いている（『村庵藁』下）。

このように、雪舟やその弟子の名を付された西湖図は、真筆・模本とりまぜて大量に日本社会に出まわっていた。<sup>(39)</sup>「杭州名所づくし絵」という実用風景画が、いかに日本人に歓迎されたかをうかがうことができる。

### おわりに——「天橋立図」への展望

京都国立博物館蔵の国宝「天橋立図」<sup>(40)</sup>（図12）は、日本を代表する景勝を、斜め上から俯瞰するかたちで描き、圧倒的なリアリティをもって見る者に迫ってくる。観念化された中国的風景ばかりを描き続けてきた日本水墨画を突きぬけたかのような大作である（90.2×169.5cm）。しかし、この絵は見たままを忠実に写したのではない。先行研究によって、つぎのようなことがすでに指摘されている。

第一に、このままの眺望が得られる地点は実在しない。じつさいにこの角度から橋立を見下ろすには、空中高く浮揚する必要がある。画面の右下隅に描かれる「冠嶋」「タツ嶋」は、天照大神が冠と杵を脱いだという伝説による名であるが、宮津湾外のはるか沖にある。絵の下辺に連なる山なみは、橋立の砂州上のある地点から東向きに栗田半島<sup>くだ</sup>



図12 「天橋立図」(『新潮日本美術文庫1雪舟』PL.18)  
京都国立博物館蔵

を眺めた風景を、左右を逆にして画面の下辺に貼りこんだものである(中嶋利雄説)。つまり、この絵の構図はきわめて意図的に再構成されたものである。

第二に、画面全体の与える印象が「西湖図」とよく似ている<sup>(41)</sup>。中央に横たわる橋立の砂州は西湖の蘇堤に見立てられ、水面を隔てて多くの寺社が配置されるのも「西湖図」と共通する。さらにそれぞれの名所の名が、「西湖図」と同様文字情報として書きこまれる。

前述した二つの島と「橋立」のほか、右から左へと「通堂」「千歳橋」「大松」「弁才天」「大聖院」「世野山成相寺」「今熊野」「大谷寺」「正一位こ籠こ之大明神」「一宮」「不動」「忘橋」「忍橋」「鳥堂」「弁才天」「慈光寺」「十刹」「安国寺」「諸山」「宝林寺」「北野」「国分寺」の文字が確認される。

第三に、絵の描かれている料紙が、数種類の大きさの紙を複雑に貼り継いだものからできており(図13)、また画面上にいくつかわず連続な箇所が認められる。これらはこの絵が下書きであること、また一時に描かれたものでなく描き足しを重ねた結果であること、を物語っている。

36.5	41.5		42.4		26.2		23.0	
23.6	23.4	23.4	23.4	23.2	23.5	23.6	23.4	28.1 27.6
36.7	41.1			42.1		26.6		
37.0	13.9	41.5		41.3		12.9	22.8	
23.8	23.8	23.4	23.4	23.5	23.5	23.4	23.5	22.7 19.3 19.8
36.9	14.2	41.2		41.1		13.0		22.9 23.0
36.6	26.5		41.4		41.8			
22.0	22.0	21.9	22.2	22.2	22.1	22.4	21.7	21.6
37.0	26.5		41.2		41.6			
37.3	26.0		41.3		41.6			
20.8	21.2	21.2	21.3	21.3	21.3	21.4	21.1	21.1 21.2
37.2	26.4		41.1		41.7			
								23.0

図13 「天橋立図」紙継概念図（『「天橋立図」を旅する』p.19）

第二点が、雪舟が中国で手がけた「実用風景画」に直結することはいうまでもないが、第一点についても、既述のように、「唐土勝景図巻」とその関連作品における金山寺の描出に類例がある。ともに実景を名所図会として再構成するための技法である。そして第三点に関しては、同様の料紙の使い方が「唐土勝景図巻」と「国々人物図巻」にも見られることが指摘されている<sup>(42)</sup>。このことから、後二者も「天橋立図」と同様、雪舟が旅先で制作した下書きの可能性があり、そうであれば真筆ということになる<sup>(43)</sup>。

以上より、「天橋立図」を、雪舟が入明以来重ねてきた種々の「実用風景画」の集大成として位置づけることができよう。それとともに、「唐土勝景図巻」・「国々人物図巻」・「天橋立図」の三作品を一括りにジャンル化することも、試みる価値があるのではないか。

1 これらの作品群で雪舟真筆と断定されているものはない（一部の作品に真筆説がある）が、本稿の観点からは、模本あるいは雪舟のエコールの作品であっても、十分に検討の対象となりうる。

2 日本においても、了庵桂悟が一四八六年に書いた「天開図画楼記」（一枝軒梅船「図書考略記」巻二所収）に「四明天童首座雲谷老人、諱等楊号雪舟」とあるほか、雪

舟の友人万里集九の『梅花無尺藏』をはじめ、江戸時代にかけて、このことにふれた文章は枚挙にいとまがない。

3 この称号をふくむ落款・序跋をもつ作品(模本をふくむ)として、①山口県立美術館蔵「倣高克恭山水図卷」(一四七四年「大明々州天童第一座雪舟」(奥書は模本))、②毛利博物館蔵「四季山水図卷(山水長卷)」(一四八六年「天童前第一座雪舟叟等揚六十有七歳筆受」)、③藤田美術館蔵「七十一歳自画像」(一四九〇年「四明天童第一座雪舟七十一歳之冬」(模本))、④山口県立美術館蔵「束帶天神図」(一四九三年「四明天童第一座雪舟七十四歳図之」)、⑤東京国立博物館蔵「破墨山水図」(一四九五年「四明天童第一座老境七十六翁雪舟書」)、⑥愛知・斉念寺蔵「慧可斷臂図」(一四九六年「四明天童第一座雪舟行年七十歳謹図之」(図1))の六点が知られている(山口県立美術館・雪舟研究会編『雪舟等楊——「雪舟への旅」展研究図録——』中央公論美術出版、二〇〇六年)。

4 「典寶」とは禪寺を訪れた客をもてなす役で、「知客」ともいい、渡航前に雪舟は京都の相国寺でこの役に就いていた。しかし、雪舟が「天童第一座」に就いたことは、了庵自身の「天開図画樓記」を含む諸史料に明らかであり、了庵がなぜこのように書いたかは不明である。

5 村井章介・須田牧子編『笑雲入明記——日本僧の見た明代中国——』(平凡社東洋文庫798、二〇一〇年)として、読み下しと注釈に原文・参考史料を付して公刊された。以下、本稿の『笑雲入明記』に関する記述は、この書に付した村井章「解説」による部分が多い。

6 雪舟研究の観点から『笑雲入明記』に注目した研究として、高橋範子「雪舟前半生期の一考察——宝徳三年の『入唐記』に導かれるもの——」(『芸術論究(帝塚山学院大学美学美術史研究室)』第二九編、二〇〇二年)がある。

7 山口県立美術館の荏開津通彦の教示によると、本図巻末の馬船の絵と落款との間には紙継目があるという。この事実は、本図はほんらい馬船の絵が最後ではなかったという推測と齟齬しない。なお、東京国立博物館・京都国立博物館編『没後五〇〇年特別展 雪舟』図録(毎日新聞社、二〇〇二年)の「国々人物図巻」作品解説(二五六頁、救仁郷秀明筆)では、落款を除



く本体が雪舟真筆である可能性が示唆されている。

8 雪舟の滞明は成化三年（一四六七）～五年であるが、『明史』本紀成化三年是歳条には「琉球・哈密・占城・烏斯蔵、同四年是歳条には「琉球・烏斯蔵・哈密・日本・滿刺加」の入貢が記録されている。哈密は西域の一国（現在、新疆ウイグル自治区の内）で、「国々人物図巻」の「西蕃人」の範疇にはいる。なおこれらの記事は、『明史』本紀景泰四年是歳条と『笑雲入明記』を対照させればわかるように、入貢した諸蕃を挙げつくしたのではない（注11参照）。

9 南朝・梁のとき作られた原図を北宋代に模写したものが、北京の中国国家博物館に所蔵される。大西廣「雪舟史料を読む14」～18・国々人物図巻、孫廷甫・画法卷（一）～（五）（『月刊百科』二〇〇三年四月～一月号）参照。なお、『甬江耆旧詩』卷五に収める寧波の文人李端の七律「送日本使僧帰国」の後半に、「肩挑雲影江頭別、衣帯天香海上還、到日賢王如有問、八方職貢列朝班（肩に雲影を挑<sup>か</sup>げて江頭に別れ、衣に天香を帯びて海上を還る、到れる日に賢王の如し問ふ有らば、八方の職貢朝班に列すと）」とある。遣明使は帰国後、「職貢図」に描かれたような、諸蕃が朝参に列する情景を語るよう、明側から従<sup>ツ</sup>とされていた。この詩から、「国々人物図巻」制作目的の一端が想像される。

10 「天開図画という言葉の中国における出典や、天開図画楼記というものの中国における先蹤」については、谷口鉄雄「天開図画楼記について」（『仏教芸術』五四号、一九六四年）にくわしい。

11 『笑雲入明記』には見えないが、他に安南・占城・哈密・瓦剌も前年に入貢しており、元日の参賀に参列したものと思われる（『明史』本紀景泰四年是歳条）。

12 一〇月二日の朝参では正使が奉天門で表文を捧げたが、皇帝が出御したとは書かれていない。しかし、ことの重要性に鑑みて、出御があつたものと考えておきたい。

13 川越泰博『モンゴルに拉致された中国皇帝―明英宗の数奇なる運命―』（研文出版、二〇〇三年）。

14 この「礼部院」を科挙の試験会場である「貢院」のこととする説がある（田中豊蔵「雪舟と明代の文人」『画説』八号、一

九三七年、二五四頁；小川裕充「雪舟——東アジアの僧侶画家——」『国華』一二七六号、二〇〇二年、三六頁；等）が、誤りである。礼部院は礼部が置かれた庁舎の名称で、承天門の南にある大明門の北東にあった（現在の天安門広場の一角）のに対して、貢院は「皇城の東側、順化門のすぐ内側の南よりの位置」にあった。綿田稔「雪舟入明——ひとりの画僧におこった特殊な事件——」（『美術研究』三八一号、二〇〇四年）一四頁参照。

15 礼部尚書姚夔（ようき）の一四六七年前後の官歴については、熊谷宣夫「戊子入明と雪舟・下」（『美術史』二五号、一九五七年）二九頁参照。

16 成化戊子季夏（四年六月、一四六八）、北京大興隆寺住持魯庵純拙が雪舟に贈った送別の詩序（永青文庫蔵）に、「去歳より四明に遊び、天童山第一座に陞る。茲に京に朝するに因り、余の丈室に詣る」とある。

17 注3所引「雪舟等楊——「雪舟への旅」展研究図録——」一二九～一三二頁、作品解説「四季山水図」（畑靖紀筆）参照。

18 注14所引綿田論文。

19 注16所引史料。

20 大西廣「雪舟史料を読む1～4・魯庵純拙贈詩（一）～（四）」（『月刊百科』二〇〇一年九月～二〇〇二年一月号）。綿田稔「雪舟入明補遺——シンポジウム報告と「破墨山水図」のこと——」（『天開図画』「雪舟研究会研究誌」六号、二〇〇六年）二六～二七頁。

21 山下裕二は①を笑見して「あるいは京博本は雪舟真筆の可能性すらあるのではないかとの思いを持った」が、④と比較すればその可能性はきわめて乏しくなるとし、④は図様を重視した模本、①は筆法を重視した模本と結論する（『室町後期山水画論——「真景」の枠組み・内海のイメージ——』『国華』一二〇一号、一九九五年、一五頁）。真筆説を否定する根拠は明晰とはいいがたい。荏開津通彦は「雪舟の中国真景画卷群について」（『天開図画』一号、山口県立美術館、一九九七年、二八頁）では「京博本を雪舟真筆とすることさえも考えられなくはない」と述べていたが、前掲『雪舟等楊——「雪舟への旅」展研究

- 図録——(二〇〇六年)の「唐土勝景図巻」作品解説では、一歩進めて「雪舟等楊筆」とした(二七七頁)。「没後五〇〇年特別展 雪舟」図録(注7所引)の「唐土勝景図巻」作品解説(救仁郷秀明筆)には「天橋立図」同様に不規則な紙継ぎもあり、描写はスケッチ風の特徴をよくとどめたところもあり、もしや雪舟真筆ではと思わせる作品である」とある(二五六頁)。
- 22 大西廣「雪舟史料を読む19・唐土勝景画稿(寧波府図)」「月刊百科」二〇〇四年一月号。
- 23 注21所引荏開津『天開図画』論文。
- 24 大西廣「雪舟史料を読む8〜10・唐土勝景図巻(一)」「月刊百科」二〇〇二年六月八月号。
- 25 辻惟雄「真景」の系譜——中国と日本——(上)」「美術史論叢」一号、一九八五年)一三〇頁。注28も参照。
- 26 加藤繁「いはゆる秋月筆揚子江図巻について」(『画説』三四号、一九三九年)九七四頁。
- 27 注21所引荏開津『天開図画』論文、三〇頁。
- 28 以上のほか寧波城内に細字で「原本約一今誤摸二日其上者為最」という注記がある(②は「日」字を欠く)。この注記について、注21所引荏開津『天開図画』論文、三七頁注18に、「やや解しにくいのが、「原本には約(丸木橋)は一本であったが、誤って二本模写した。上にある方の橋が正しい」という意味であろうか。たしかにボストン本・狩野文庫本のこの部分には橋が二本描かれている。この注記が雪舟原本にもたらあったものとするれば、雪舟がこれらの画巻の制作に粉本を用いており、しかもこの部分においてはそれをかなり忠実に模そうとしていたこととなる」とある。
- 29 注6所引論文、二九〜三〇頁。
- 30 「雪舟史料を読む14・国々人物図巻、孫廷甫・画法巻(一)」「月刊百科」二〇〇三年四月号)四五頁。
- 31 注21所引山下論文、一五頁。
- 32 詩の全文は「万古波心寺、金山名目新、天多剩得月、地少不生塵、過槽妨僧定、驚濤濺仏身、誰言張処士、題後更無人」(『全唐詩』卷七百四十三)。

- 33 詩の全文は「遺音寂寂鎖龍門、此日青囊竟不聞、水底有天行日月、暮前無地拜兒孫、秋風野寺供生飯、夜月漁燈照斷魂、我有誅歌招不返、停帆空見白鷗群」。熊谷宣夫「楊子江図巻と唐山勝景図稿」(『三彩』七五号、一九五六年)参照。
- 34 大西廣「雪舟史料を読む11・13・中心□忠「弔郭璞墓」(一)」「(三)」「(月刊百科)二〇〇二年九月(二〇〇三年一月号)。
- 35 村井章介「十年遊子は天涯に在り——明初雲南謫居日本僧の詩交——」(『アジア遊学』一四二号、二〇一一年)。
- 36 宮崎法子「西湖をめぐる絵画——南宋絵画史初探——」(梅原郁編『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、一九八四年)。
- 37 蘇東坡の西湖を詠じた詩「飲湖上初晴後雨」の「水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇」による成語。なお、有名な雪舟自贊のある「破墨山水図」に加えられた天隱龍沢の賛にも、「玉澗江山誰又摹、雨奇晴好对西湖」とある(東京国立博物館蔵)。
- 38 杭州出身で地方官を歴任した田汝成(一五〇三〜一五七)は、洪静夫の家で「李嵩作」という落款の入った西湖図四幅を見て、「寺觀峯陽皆有標題、工巧絶倫、蓋當時進御物也」と記している(『西湖遊覧志余』卷一七)。洪静夫は正徳五年(一五一〇)の挙人で西湖の孤山に別業を構えたという。李嵩は杭州出身の南宋の画院画家で、多くの西湖図がかれにアトリビュートされていた(注36所引宮崎論文、二二一頁)。
- 39 戸田禎佑「雪舟研究に関する二、三の問題」(山根有三先生古稀記念会編『日本絵画史の研究』、吉川弘文館、一九八九年)は、「模本や垂流作のなかに残る雪舟流の「西湖図」が実景風でないこと」を指摘し、その理由を「彼(雪舟)は西湖図を型として受け入れた：：彼は西湖の実景として西湖図を画いたのではない」と説明する(一六一〜一六二頁)。
- 40 「天橋立図」についてはさわめて多くの研究があるが、議論全体を俯瞰できるものとして、『天橋立図』を旅する——雪舟の記憶——(朝日百科日本の国宝別冊・国宝と歴史の旅11、朝日新聞社、二〇〇一年)と、『天開図画』第四号の特集「中嶋利雄氏の天橋立図論」(二〇〇一年)をあげておく。
- 41 熊谷宣夫「西湖図と天橋立」(『大和文華』二三号、一九五七年)。注36所引宮崎論文、二〇九頁以下に、「天橋立図」に酷似

する構図をもつ李嵩筆「西湖図巻」（上海博物館蔵）が紹介されている（注21所引山下論文、一七〜一八頁参照）。

42 筆者は山口県立美術館の荏開津通彦から調査結果の提供を受けた。心よりお礼申し上げます。

43 注7所引図録、二五六頁の「唐土勝景図巻」「国々人物図巻」作品解説（救仁郷秀明筆）に、「料紙が整わない旅先で雪舟自身の手によって描かれた可能性もある」とある。また、宮島新一『雪舟——旅逸の画家——』（青史出版、二〇〇〇年）は、「唐土勝景図巻」を模本としつつ、「国々人物図巻」については「人物のみならず駱駝や象などの奇獣や船まで写した前者は、真筆と見ても良いだろう。人物の表現には拙宗の人物図に似たところがあるので、在明中の作と考えられる」と指摘する（九二頁）。

図版の典拠は以下のとおり。

図1・4・6〜11 東京国立博物館・京都国立博物館編『没後五〇〇年特別展 雪舟』（展覧会図録、毎日新聞社、二〇〇二年三月）

図2・5 山口県立美術館・雪舟研究会編『雪舟等楊「雪舟への旅」研究図録』（中央公論美術出版、二〇〇六年二月）

図3 村井章介・須田牧子校注『笑雲入明記 日本僧の見た明代中国（東洋文庫798）』（平凡社、二〇一〇年一月）

図12 島尾新『新潮日本美術文庫1雪舟』（新潮社、一九九六年二月）

図13 島尾新『国宝と歴史の旅11「天橋立図」を旅する』（朝日新聞社、二〇〇一年四月）

# Sesshū Tōyō 雪舟等楊 and Shōun Zuikin 笑雲瑞訥 —Imaging Ming China through Water Paintings and a Travel Diary—

MURAI Shōsuke

Sesshū Tōyō, the most famous painter in medieval Japan, traveled in China together with the official Japanese embassy between 1467-69. During his journey he has painted several pictures as part of his works, the *Kuniguni jinbutsu zukan* 国々人物図巻 (Illustrated Scroll of Figures from the Various Countries) and the *Tōdo shōkei zukan* 唐土勝景図巻 (Illustrated Scroll of Scenic Views of China). On the other hand, there was a Zen-monk, Shōun Zuikin who went to China as member of the former official Japanese embassy in 1453-54. During his stay he kept a travel diary titled *Shōun nyūminki* 笑雲入明記. Both Sesshū and Shōun traveled almost on the same route. The pictures of Sesshū and the writings of Shōun help us to imagine China in the middle of the 15<sup>th</sup> century.

For example, at the end of the year, “barbarian” envoys from different countries arrived one after another in Beijing in order to participate at the imperial audience for the New Year’s greetings. Sesshū painted these “barbarians” in his work and Shōun made a record in his diary about the exchange with them. Sesshū was also praised by the Chinese for his painting on the wall of the building of the Ministry of Rites in Beijing. According to Shōun’s diary, the visit in the Ministry of Rites was a regular practice after the audience with the emperor. That is why we may suppose that the Minister of Ministry of Rites asked Sesshū to paint a picture on the wall, when the Japanese visited the Ministry after the audience.

Sesshū drew pictures of the beautiful landscape on the way from Ningbo to the crossing point of the Yangtze River for his illustrated scrolls, but he also painted separated pictures of the same landscape. Sesshū made these pictures in order to prepare himself for orders in Japan. He expected that Japanese

customers would order “pictures of noted places in China” after his return to Japan. These pictures, however, do not always represent the actual landscape that Sesshū really saw in China. He sometimes rearranged or changed the actual landscape for his own purposes, which was a usual method of Chinese landscape painting. We can find the similar mentality in the diary of Shōun, who sometimes used his imagination when he was writing his account on sightseeing in China or when he was composing poems on natural landscape.

The *Amanohashidate zu* 天橋立図 (View of Amanohashidate), designated as a National Treasure was painted by Sesshū according to the techniques of “practical landscape painting”, that he mastered during his journey in China. This work can be considered as the crystallization of these techniques from China.